

Title	御別れに臨みて
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1922), 2(22): 177-179
Issue Date	1922-09-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/159789">http://hdl.handle.net/2433/159789</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 天界第二十二號(第二卷)

大正十一年  
十月十一號

## 御別れに臨みて

山本 一清

いよ／＼来る九月十四日横濱出帆の日本郵船富山丸で、先づ米國へ参ります。(も少し早く出て、ハワイに立寄り、火山を観るつもりで居りましたが、近頃、大噴火して、山の見學が困難になつたと聞きましたので、出帆を少し變へました。)

外遊中の豫定を申しますと、(まだ、夢のやうに漠然たるものではありませんが、先づヤーキース(Yerkes Observatory)へ参ります。こゝはシカゴ大學附屬の天文臺で、今より二十八年前に創立されたもの。ヤーキース氏の寄附による四十吋望遠鏡を中心とし、新式の設備があつて、今のウイルソン山天文臺長ヘール博士が初代の天文臺長となり、天體物理學研究といふことを始めからの目標として活動して居ます。

先年、故一戸博士も此所で研究されたことがあります。今はフロスト教授が臺長で、バアナド教授やファン、ピースブロエク教授等が居られます。私はあらかじめ、フロスト氏へ手紙を送りましたところ、こちから行くのを大へん喜んで呉れまして、すぐさき「Volunteer Research Associate」に囑托するから」といふ返事が参りました。私の希望としてはバアナド教授の下で、天の河の寫眞研究をして見たいと思つてゐます。とは言ふものの、同所は種々の設備が完備してゐるのではあり、又、私としては滞在期間も比較的永いので、暇があれば、その外にもやりたい事をやるかもしれません。それに、シカゴ大學には、天體力學の大家モウルトン教授や、物理學ではマイケルソン教授やミリカン教授も居ますから出かけて行つて、種々、學びたいと思ひます。

來年九月には、米國カリフォルニア洲から隣國メキシコへかけて、日食皆既があります。之れは可なり好い條件の下に行はれるので、米國の天文學者達は、數年前から、いろ／＼と評判しながら、待ちこがれてゐます。

ヤーキースからも觀測遠征隊が派遣せられる筈でありますから、私は是非それに参加したいと思つてゐます。(日食遠征と言へば、私は去る大正七年の夏、鳥島へ行つたことがありますけれど、雪のため結果は餘り思はしくありませんでした。)此の機會に、私はカリフォルニアの諸所の天文臺を訪問し、特に、ヤーキースと縁の深いウイルソン山には三四ヶ月も滞在して、太陽や新星の研究をしたいと思つてゐます。

次には渡歐前、是非、ハアプアド大學天文臺へ行きたいと思ひます。こゝは、比較的、友達も多く、従つて、居やうと思へば居心地の好いところだろうと思ひますが、何分、時が餘り充分でないので、果してどれだけ仕事が出来るかわかりません。或は何もしないで、只、訪問しただけで、すぐに米國を去らなければならぬかも知れません。

來年の末か、次の年の始め、歐洲に渡り、英獨の順にまわりたいと思ひますが、或は此の順序が逆に

なるかも知れません。あまり先き／＼のことを今から定められるものではありませんが、獨逸では非訪問もし、都合好ければ滞在研究もしたいのはポツダムとハイデルベルヒの兩天文臺です、ポツダムは、天才シヅルツシルドが戰爭中に死にました後、今はルーデンドルフ博士が臺長になつてゐますが、何と言つても、こゝは同國に置ける天體物理學の中心地であり、又、列のアインシュタインやフロインドリヒなどいふ人々も居るところですから、行けば、定めし有益だらうと思ひます。

ハイデルベルヒの方は、例のラルフ教授の天下で獨逸に珍らしい實際觀測家が揃つて居り、私が日頃から米國のバアナアド氏と共に特別に尊敬してゐるのが此のラルフ氏でありますから、願くば此の天文臺の活躍實況を學びたいものです。

英國で行つて見たいのは、グリーン井チビケムブリチであります、時が無ければ、此等は少し御丁寧な訪問といふことに止めて、或はサウス、ケンシン

トンのファウラ教授の下で、暫く、天體物理學的實驗を見學するかも知れません。それから私は英國を獨逸よりも後にするかもしれない一つの理由は、英國から直ぐに、船で南亞弗利加の喜望峯天文臺へ行きたい野心があるからなのです。之れがためには英國の學者から紹介狀を貰ひ、そこから乗船するのが便利に違ひありません。南亞は邊境ではありませんが、言ふまでもなく、南極附近の星座が立派に見えるのと、今一つ具體的な問題は、最初、ヤーキースで行つた天の河研究を、こゝへ來て完成したい希望があるのです。殊に天の河の離れ島のやうに見える大小二個のマゼラン雲の研究は是非こゝでやりたいものです。

日本への歸着は、大正十三年の暮れか、其の翌年の春か。とにかく、四月の新學年の間に合ふやうに歸りたいと思つて居ります。

私が去つた後も、同好會は心配なく發達して行くことと信じます。編輯は荒木氏、事務は海老氏が主

としてやつて下さる筈ですし、新しく來着の上田助教授や其の他の方々も骨を折つて下さると信じますし、東京の方からも、相變らず、御援助下さる方が多かろうと思ひますから。しかし、一般の會員方の御勉強と御奮闘も是非御願ひせなければなりません。今は、我が日本の天文界にとつて大切な時であります。私も自分の責任は充分感じて居ります。それで「天界」には毎號何等かの原稿を送るつもりで居ります。ですから、遠く離れましても、誌上に於いて常々、御目にかゝれることと思ひます。記行文は、委囑により、時々、新聞に寄せます。先づ差し當つて、私のアドレスは

Mr. Issei Yamamoto, Yerkes Observatory,

Williams Bay, Wisconsin, U. S. A.

それから、留守宅は

滋賀縣栗太郡上田上村大字桐生、山本清之進方。

妻は同行しますが、子供は右所に殘して置きます。

個人的には、或は、御ぶさた致すかもしれません

——どうぞ御きげんよろしく。